

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 Umetbaeva Kalyiman

【所属】 (助成決定時) 東京藝術大学

【研究題目】

アクンの技芸の変化 - キルギス共和国における衰退と復活-

【研究の目的】 (400字程度)

本研究は、中央アジアに位置するキルギス共和国におけるアクンの技芸に焦点を当てる。アクンとは三弦楽器コムズを弾きながら即興的に歌、語り、話芸を行う芸能者を意味し、そこには詩人、歌手、器楽奏者、作曲家などの概念がすべて包含される。

本研究の目的は二つあり、第一は、キルギスにおいてアクンの技芸が一度衰退したのち復活している点に鑑み、その歴史的背景を探ること、第二は、20世紀における西洋文化の影響によるアクンの技芸の変化を解明することである。

本研究では上演形態、伝承方法、レパートリー構造の面からアクンの技芸を考察する。これと同時に、ソ連時代に行われた先行研究と申請者の現地調査の結果を分析・比較し、アクンの技芸がソ連成立以前、ソ連時代、ソ連崩壊後の三時代に応じてどのように変化し、いかなる社会的背景があったのかを解明する。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

アクンの技芸を理解するためには、音楽的アプローチと、言語的アプローチ二つの側面から検討できる。

音楽的な面からの調査方法としては、先行研究や音源などの収集と精査をはじめ、アクンの技芸に携わる人びとへのインタビューや演奏会などの現地調査が挙げられる。

今回の助成期間は1年間で、2014年10月1日から2015年の9月30日までとなっているが、申請者は、この期間に二つの国で現地調査を行った。第一は2015年の2月から3月にキルギスの首都ビシケクで、第二は2015年7月にカザフスタンの首都アスタナであった。

ビシケクではサドゥック・シェル・ニヤズ (Sadyk Sher-Niyaz) (1969-) という人物にインタビューを行った。彼はキルギス共和国の社会的・政治的活動家であり、2000年にアクンの技芸を復興するために「アイトウシュ」協会基金を設立した。そこで、サドゥック・シェル・ニヤズと「アイトウシュ」協会基金に所属する若手と熟練のアクンにインタビューを取り、演奏形態や、伝承方法などに焦点を当てつつ、ソ連崩壊後から現在までのアクンの技芸の状況や復活の理由を探った。

【結論・考察】 (400字程度)

今回の研究調査は主にキルギスとカザフスタンで行い、インタビューや、コンサートなどでの録音・録画した演奏資料を収集することができた。現在での申請者の活動は、第一次資料となる A. ザタエヴィチと V. ヴィノグラドフの文献を参考にし、2カ国で行った現地調査とソ連設立以前のアクン技芸との比較を行い、その相違点と共通点を探ることで、社会的・歴史的、または国民性の特徴から異なっている点を分析している。

また本研究の目的は、語り物 oral narrative としてのアクンの技芸の音楽的構造を分析することであり、この目的を達成するには、1960年の Albert B. Lord, *The Singer of Tales* の口頭形式理論 oral-formulaic theory を参考しながら、『日本の語り物 口頭性・構造・意義』(2002) で取り上げられている平家、能、浄瑠璃、浪花節、座頭琵琶、ゴゼ歌の音楽構造を見通すモデルや分析方法を参考にし、アクン技芸の分析を試みている。この文献によると、語り物は、曲・セクション・フレーズという三つの構造レベルからなり、構造の中心はセクションで、通常、セクションとセクションとの間に楽器の伴奏が挟まれる。したがって、申請者はこの分析方法を修正し、アクンの音楽分析に適用している。このような分析は、旋律のおおまかな把握、理解にはきわめて有効で、このモデルを柔軟に用いることにより、語り物の種目の共通点や相違点が明らかになってくる。